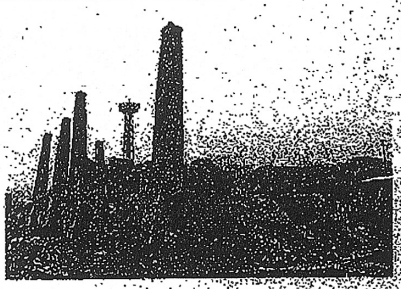
2010 4/23(金) 朝日新聞

新聞 第3種郵便物認可

ホフマン窯 保存へ一歩

舞鶴の財団 修復計画案発表

れんが10万個積み直し



崩壊が進むホフマン窯＝舞鶴市西神崎

老朽化が進んで倒壊の恐れがある国の登録有形文化財のれんが製造施設「ホフマン窯」（舞鶴市西神崎）を保存修復しようと、舞鶴文化教育財団（高橋照理事長）が保存修復計画案をつくった。22日、工学系の研究者や行政の文化財担当者らを現地に集めて会合を開き、発表した。

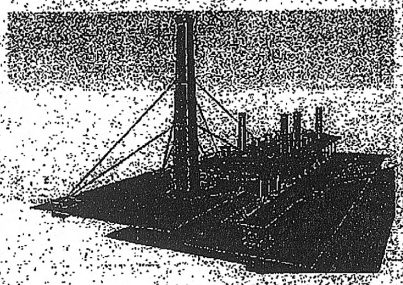
同財団と限会社によると、亀裂が見られる高さ24㍍の大煙突は倒壊の恐れがあるため、先端から9㍍までを撤去し、新たにれんがを積み直したう え四方にワイヤを張って倒壊を防ぐ。9本が残る小煙突や窯本体は現状で補強するが、劣化が進んだれんがを取り除くため、合計約10万個のれんがを新たに焼き直して積む必要があるという。さらに上屋を復元して窯本体の上部を覆い、雨よけにする。

工事は10カ月～1年を要し、周辺整備も含めると費用は1億4千万～1億5千万円かかる見通し。工事費や維持管理費は財団が負担するという。観光事業などは予定していないが、窯内部に見学ルートを設けるという。

会合では、文化庁の西岡聡・文化財部参事官が「解体やれんがの積み直し方によっては文化的価値が損なわれる恐れがある。建物の原形がどうだったのか、着工前に歴史的な調査をしてほしい」と要望した。別の出席者からは「専門家による委員会をつくって工事をチェックする必要がある」との声も上がり、高橋理事長がそれらの意見に沿った形で工事を行うと応じた。

内部に見学ルート設置

ホフマン窯は国内に4基しか残っておらず、舞鶴のものは1999年に国の登録有形文化財になった。所有した会社が倒産して競売にかけられ、高橋理事長の長女の夫で同財団理事の博さんが7年前に落札した。（平畑玄洋）

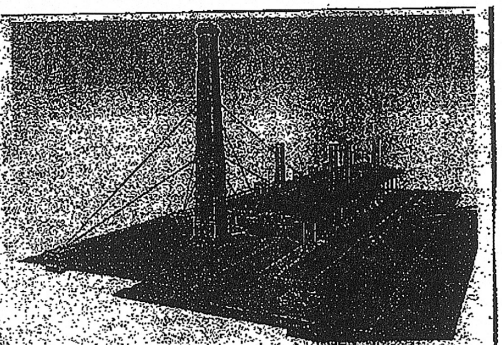


ホフマン窯保存修復の完成イメージ図＝限会社提供

2010 4/23(金) 京都新聞

窯 修復へ協議

ホフマン 6月着工も



財団が示したホフマン窯の改修イメージ図。専門家らの意見を設計に反映させる

国登録有形文化財に携わる市民グループなど10人が出席。財団の「ホフマン窯」（舞鶴市西神崎）の修復を検討している財団法人「舞鶴文化教育財団」は22日、現地に建築や文化財の専門家などを招き、工事計画について協議した。設計に専門家らの意見を反映させたうえ、早ければ今年6月にも着工する見通しとなった。

この日は、建築専攻の大学教授や文化庁の文化財調査官、保存に高橋照理事長は、大煙突上部を解体して新しいれんがを積み、窯本体のかれさを取り除いて再構築し、上屋を新設する計画案を示した。専門家からは「史料的調査を深めるべき」「強度計算は十分か」などの質問や意見があり、市民グループから「いつ倒れるか分からず、一刻も猶予がない」との声も上がった。

高橋理事長は「専門家の意見を設計に反映させ、出来るだけ早く工事を進めたい」と話した。工事は10カ月～1年かかる見通しだという。（米沢幸雄）

2010 4/23(金) 毎日新聞

原形保ち強度確保へ

ホフマン窯 修復へ 委員会で協議

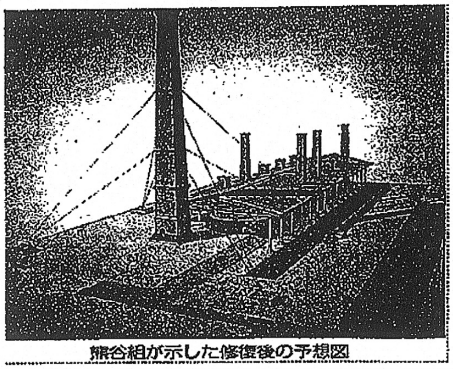
舞鶴

崩壊が進む国登録有形文化財「神崎ホフマン窯」（舞鶴市西神崎）の保存修復工事の打ち合わせ会が22日、文化庁や府、市の担当者、手織経験者らが出席し、現地で行われた。修復を行う財団法人舞鶴文化教育財団（高橋照理理事長）が、24㍍の大煙突のれんがを一部組み直すなど、損傷がひどい部分を修復して、一般見学を可能にする案を提示。出席者から、九の姿の歴史的調査を進めてから修復に入るように提案があり、建築などの専門家3人と事を請け負う予定の熊谷組が委員会を作って、原形を損なわず、最も確かな修復案を検討することになった。高橋理事長は「社会的文化遺産として後世に伝えたい。壊れてしまっては遅いので、できれば1、2カ月で結論を出して工事にかかりたい」としている。

赤れんがを製造していた神崎のホフマン窯は、1958年ごろから使われなくなり、荒廃が進んでいる。

熊谷組によると、大正末期の姿に戻すことを基本に、傷んだれんがを交換、崩落危険個所の補強工事を行う。工事期間は10カ月～1年。完成すれば窯内部に入って見学することも可能となる。会議で、高橋理事長は「周辺設備も含めれば1億5000万円程度の費用がかかる見込み」と述べた。

国登録有形文化財の修復工事は、国に届け出をすれば可能。文化的価値を大きく損なう変更があれば、登録を取り消される可能性もあるが、文化庁の担当者は「確定的なことは言えないが、今回ぐらいなら大丈夫ではないか」との見通しを示した。【山本真也】



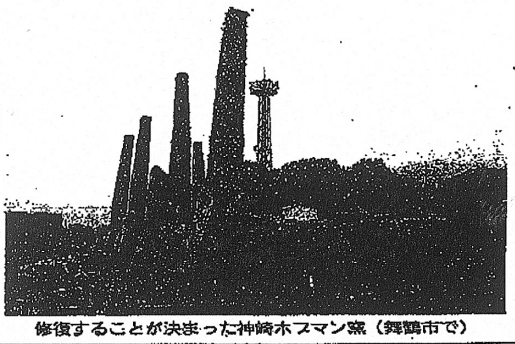
熊谷組が示した修復後の予想図

2010 4/23(金) 読売新聞

神崎ホフマン窯 修復へ

舞鶴文化教育財団 重文指定目指す

国の登録有形文化財で、崩壊の恐れが出ている舞鶴市西神崎の「神崎ホフマン窯」について、所有者が理事を務める財団法人「舞鶴文化教育財団」（高橋照理理事長）が修復に乗り出すことが22日、決まった。今後、専門家らと協議して修復方法を決め、2か月後の



修復することが決まった神崎ホフマン窯（舞鶴市で）

を目指す。

神崎ホフマン窯は、旧海軍の軍港建設などに必要なれんがの製造用に1897年に造られた登り窯を、大正末期に連続焼成できるホフマン式に改造。高さ約24㍍の大煙突などを再利用しながら焼成室ごとに小煙突（1本）を持つ楕円形輪窯（縦45㍍、横9㍍）で、同じ様式は全国で4例だけ残るという。

れんがの製造は1958年頃で中止され、99年に登録有形文化財となったが、所有会社が倒産、理事が2003年に買い取り、同財団が管理している。07年度には経済産業省の「近代化産業遺産」に認定された。

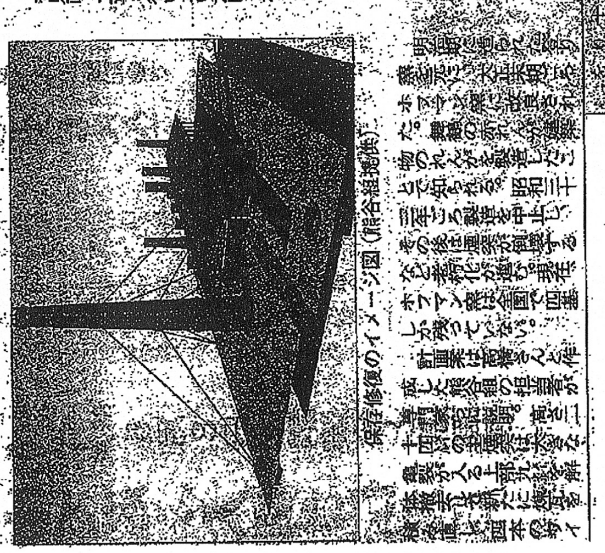
現在、主煙突に亀裂が入り、小煙突の一部は倒壊するなど老朽化が激しく、全体が崩れる危険性が高まっている。同財団はこの日、ホフマン窯に隣接する建物で文化庁、近畿経済産業局、府、同市、大学教授ら文化財、建築の関係者15人の意見を聞き、修復を決めた。方法は、「文化財的価値などを考えて検討する」とし、今後、専門機関の調査を経て出席者から選んだ4人で検討する。修復費は1億5000万円程度になる見込み。

高橋理事長は「何とかして将来に残し、重文指定を目指していきたい」と話している。

崩壊の危機に 舞鶴文化教育財団が計画案

再出発の意見反映し 着工へ

「重文指定目指す」



完成後のイメージ図（熊谷組提供）

2010 4/21(水) 舞鶴市民新聞